

般若經に於ける往生來生の思想

加 藤 智 學

釋尊の根本敎説は、要するに苦集滅道の四聖諦の法であつた。生を離れて後有を受けざる安穩なる涅槃(Nirvāṇa)に到達するのが佛教の理想である。此の苦の滅を證得せんが爲に、五根を修し、八正道を行じ、戒定慧を學習する。かくて、苦を如實に知り、苦の集を如實に知り、苦の滅を如實に知り、苦の滅の道を如實に知つたのが、その慧根であり慧學であり、即ち般若(Prāṇa)である。戒を持し定を修し慧を完具して現法に般涅槃を得た者を阿羅漢(Arhan)といふ。阿羅漢は、一切の煩惱を永く斷盡して、梵行すでに立ち、生すでに盡きて、更に後有を受けない。されど、多數の佛弟子の中には、現法に於て此の阿羅漢果を證得すること能はずして命終つた者が頗る多かつた。其等の修道者には、其の斷惑の深淺によりて、阿那含(Anāgāmin 不還)・斯陀含(Sakṛdāgāmin 一來)・須陀洹(Srotāpanna 預流)といふ名稱が與へられてゐて、其の死後には一回又は數回の生を経て涅槃に到るものであると爲されたのである。生には、往生もあれば來生もある。有學の修道者は、往

生したり來生したりして、一回又は數回の轉生を経た後でなくては、諸漏を斷盡して涅槃を得ることはできない。されば、出家在家の有學の多くの佛弟子は、死後に往生し來生して終に涅槃に到達することを、思念せざるを得なかつた。阿羅漢を除いてほかの修道者は、どうしても天界人界に往生來生して修道を増進せしめねばならなかつた。かうした往生來生は、原始佛教より爾の後の部派佛教に貫通して佛徒の間に流動せる實踐上の信念思想である。所謂、聲聞(Śrāvaka)の修道の上に思想せられた往生は、斯くの如き意義のものであつた。

二

聲聞の佛弟子は、如上の往生思想を持して修道したのであるが、般若(Prajñā 智慧)の深廣なる佛徒は、涅槃(Nirvāṇa 滅度)を急がず、悲智圓滿の無上正等正覺(Anuttara-Samyak-Sambodhi)を志求し、幾多の佛所に往生して、自利利他の功德を積累し、菩薩(Bodhisattva)摩訶薩(Mahāsattva)の大乗を修行せんとした。佛果に到達せんとする菩薩の修道は、聲聞の如く短小なるものではないと考へられた。されば、菩薩が佛果を成就するまでには、無央數劫に六波羅蜜を修行して、諸佛を供養し衆生を教化し、無數の往生を経て福智を圓成せなければならぬ。釋尊の因位本生がさうであつたと思せられ、久しき後に彌勒(Maitreya)が下生して成佛せらるゝと信せられた。彌勒菩薩の補處成佛は、早くより佛徒の信する所であつて、後の小乘教徒も、かうした菩薩の志行を大に尊

崇したのであつた。さるほごに、佛滅後三四百年頃には、甚深般若を修得せる佛徒の間に、廣く菩薩大乘に進趣すべきを勸説する大乘運動が興起しかけて、諸種の大乗經典の誦出を見るに至つた。菩薩の修行は、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜の徳目を以て示教せられた。此の六波羅蜜を修行し忍辱無瞋によりて阿閼 (Aksobhya 不動) の名を得たる菩薩が、東方の妙喜世界に成道して、阿閼如來と號し、今現に在しまして説法利生し給ふことが、誦傳せられた。かくて、大乘を修行する菩薩は、此の世界の人界天界のみではなく、他方の佛世界に往生し、一佛國より一佛國に至り、諸佛を供養し衆生を教化して、自利利他の功徳を増進すべきであると思念せらるゝに至つた。大乘教徒は、十方に佛の現在し給ふ世界ありと信じ、十方無量の世界の中には、淨土あり穢土あり、有佛の土あり無佛の土あり、菩薩は此等の國土に往生し來生して自利利他の徳行を勤修すべきであると思念した。その有佛の淨土に往生せんとするには、先づ東方阿閼佛 (Aksobhya-buddha) の妙喜世界への往生、西方阿彌陀佛 (Amitāyus-buddha) の極樂世界への往生が願求せられた。阿彌陀佛の因位は曇摩迦 (Dharmakara 法藏) 菩薩である。曇摩迦菩薩は、二十四願を結誓し、六波羅蜜を修學し、過去の諸佛に師事して、無央數劫に功を積み徳を累ねて、終に西方の須摩題 (Sukhāvatī 極樂) 世界に於て作佛せられた。阿閼菩薩・曇摩迦菩薩が誓願を發し六波羅蜜を修行し佛國土を淨めて衆生を成就し給ひしが如く、諸の摩訶薩は、淨佛國土・成就衆生の誓願を發起して、六波羅蜜

を修行し、無上正等正覺を圓成せんとする。諸の波羅蜜の行は甚深般若によりて淨修せられねばならぬ。波羅蜜(Paramita)は、度とも到彼岸とも譯す。生死の苦海を度脱して一切智の彼岸に到達するの義である。されば、出世間の無所得の智慧によりて修行せなければならぬ。布施・持戒・等の福業は、若し般若(Prajna 智慧)の方便なければ、人天の樂果を生ずる善因に過ぎない。深般若に依りて、空・無相・無作の三解脱門に順じ、施を行じて施相を見ず、戒を行じて戒相を見ず、有所得の著執を離れ、無所得の清淨行を修すれば、布施・持戒・忍辱・等は、波羅蜜(Paramita)の行であり、佛果を成就する眞實清淨の善根である。されば、般若波羅蜜によりて諸の徳行を波羅蜜たらしむるのである。深般若の方便によりて無所得の諸波羅蜜を淨修して、菩薩摩訶薩は、佛國土を淨め衆生を成就する。是れ菩薩大乘の法である。さるほごに、大乘興起の最初期に於いて、先づ『六波羅蜜經』・『阿閼佛國經』・『大阿彌陀經』・小品『般若波羅蜜經』・等が誦出せられた。

三

佛滅後。第一結集に於て合誦せられた教法は、その後、十二部經に分類せらるゝことゝなつた。其の中の毗佛略(Vaipulya)は、方廣とも廣經とも譯されてゐる。佛滅後六百餘年の頃に編作せられた『阿毘達磨大毘婆沙論』百二十六には、十二部經を解説して、「方廣とは云何、謂はく、諸經中廣く種々の甚深の法義を説ける五三經『梵網』・『幻網』・『五蘊』・『六處』・『大因緣』等の如きなり。脇

Paśva)尊者の言はく、此の中の『般若』を説いて方廣と名づく、事用大なるが故なり」と、毗佛略(方廣)を解説してゐる。茲に引例せる諸經は『長阿含』・『中阿含』などに編傳せらるゝものであるが、『般若』は大乗の『般若波羅蜜經』の原始本を指示してゐるのであらう。佛滅後七百年頃出世の龍樹(Nāgārjuna)菩薩の『大智度論』三十三には、亦十二部經を釋論して、「廣經とは摩訶衍(Mahāyāna 大乘)に名づく、所謂、『般若波羅蜜經』・『六波羅蜜經』・『華手經』・『法華經』——」等と、毗佛略(廣經)を解説せられてゐる。又『智度論』四十六にも『六波羅蜜經』・『摩訶般若波羅蜜經』等の諸大乘の名が引例せられてゐる。蓋し『六波羅蜜經』と『般若波羅蜜經』は原始大乘の根本聖典でなければならぬ。されば、『無量壽經』の最古本である大『阿彌陀經』には、「六波羅蜜經を奉行し」と説いてあるし、『阿閼佛國經』でも大『阿彌陀經』でも、その先に六波羅蜜を説ける經があるものとして、布施・持戒・等を一一叙說せず、六波羅蜜の名稱を使用して敎說せられてゐる。部派の聖典では大衆部系に編持せられたものと見られてゐる北傳の「增一阿含經」が、六波羅蜜を説いてゐる。それらも大乘の『六波羅蜜經』を承け容れて説かれたものゝやうに想はるゝ。かくて『阿閼佛國經』・大『阿彌陀經』などの説相には、『般若波羅蜜經』の影響は殆ど見出し得ないし、阿閼佛の尊號は小品『般若波羅蜜經』に説かれて、此の『般若』已前に阿閼佛を説ける經がなければならぬことを想はしむるものがあるので、此等諸經の説相を比較する時、『六波羅蜜經』と小品『般若波羅蜜經』との

間に『阿閼佛國經』を置き、大『阿彌陀經』は『阿閼佛國經』の次後に成されたものと見なければならぬが、大體やはり其の邊に置いて、其の成立の順序を想定せねばならぬ。小品『摩訶般若波羅蜜經』(羅什譯十卷)は、其の後、敷衍せられて、大品『摩訶般若波羅蜜經』(羅什譯二十七卷)の成さるゝに至つた。小品を敷衍したのが大品か、大品を抄略したのが小品か、といふことが、近頃、學者間に異論の存することではあるが、此は小品を敷衍したものが大品であると見る方が正しい。大品『般若經』が成された後に、『十地經』(華嚴)、『無量義經』、『法華經』等が出来たやうである。『阿彌陀經』は、大『阿彌陀經』の後に『無量清淨平等覺經』が成されたやうであり、『般若經』と同じ頃に小『阿彌陀經』が誦出せられたやうであり、更に亦『般若』、『華嚴』の影響を承けて四十八願を説ける大『無量壽經』が誦傳せらるゝに至つたやうである。

四

經典成立の順序は大體かやうに見當づけて置いて、偕て大乘初期の往生思想を觀察することにしやう。『六波羅蜜經』は現存の何れの經典に相當するか、今の處、明了でないから、更に研尋することにして置いて、小品大品の『般若波羅蜜經』に於ける往生思想を觀察することにしやう。勿論、『阿閼佛國經』には阿閼佛國への往生、大『阿彌陀經』等には阿彌陀佛國への往生が説かれてゐる。此等は、かれこれ研尋するまでもないことであらうが、『般若經』となると、諸法皆空といふやうな

ことばかり説いてあつて、往生や淨土の事は更に説いてないと、想ふてゐる人もないでもないことであるから、今此の『般若經』の所説に據りて、大乘初期の往生思想を偲びたいと思ふ。『阿闍佛國經』や大『阿彌陀經』に説かれたる淨佛國土や聞名往生の信念思想の内容背景を鮮明ならしめんとするには是非とも小品大品の『般若經』に據らねばならない。又その大品『般若波羅蜜經』を解釋せる論が龍樹菩薩の『大智度論』であるから、『大智度論』の釋義をも考察して置く必要がある。かうした關係を考慮しつゝ、『摩訶般若波羅蜜經』に於ける往生思想を伺尋することにしよう。

小品『般若』にも類似の經本が種々あり、大品『般若』にも類似の經本が種々あるけれども、一々列舉しては頗る繁雜な事になるから、今は鳩摩羅什 (Kumārajīva) 三藏によりて傳譯せられたる小品大品の『般若經』に據りて其の所説の事義を窺ふことにする。小品『般若經』四「不可思議品」の終には、他方の佛前に往生することが説かれてゐる。

舍利弗 (Śāripūṭa)。我、其の心を觀れば、則ち隨喜を生ず。是の人、菩薩道を行じ、當に法を以て無量百千萬の衆生を示教利喜して阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttara-Saṃyak-Saṃbodhi) 無上正等正覺) に住せしむべし。是くの如き善男子善女人、心到大乘を樂ひ、他方の現在の佛前の説法の處に生せんと願じ、是の人、彼に於て續いて復廣く般若波羅蜜 (Prajñā-Paramitā) を説きたまふを聞きて、彼の佛土に於て、亦復法を以て無量百千萬の衆生を示教利喜して阿耨多羅

三藐三菩提に住せしめん。

此の經説は、大品『般若經』十三「聞持品」の終には、次の如くに説かれてゐる。

舍利弗。是の諸の善男子善女人、爲す所の心は大なり。受くる所の色聲香味觸法も亦大なり。亦能く大に施し、能く大に施し已りて大善根を植ゑ、大善根を植ゑ已りて大果報を得、衆生を攝せんが爲の故に身を受け、能く衆生の中に於て内外所有の物を捨つ。是の善根の因縁を以て發願して他方國土の現在の諸の佛の深般若波羅蜜を説きたまふ處に生せんと欲し、諸の佛の前に於て是の深般若波羅蜜を開き已りて、亦彼に於て百千萬億の衆生を示教利喜して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめん。

大心の善男子善女人は、衆生を攝化せんが爲に身を受けて他方の佛國に往生し、佛の説法を聞き衆生を利濟して、菩薩道を修行するのである。此の義趣は、『大智度論』六十七に釋論せられてゐる。

是の善男子は、未だ道を得ざるとき、清淨なる福德の故に、上妙なる五欲を得、能く意を盡して用ゐ、亦能く意に隨ひて施與し、或は窮乏に施し、或は福田に種ゑ、若は善知識を得て佛法を聞き、著欲の心息みて衆生を憐愍し、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、内外の所有の布施、愛惜する所無く、若は戒を持し、遍く十善道を行じ、戒律儀を具へ、慈悲心を以て共に行す。餘の善法も亦是くの如し。みな深心を以て自ら行じ、及び他人を引導して善道を行せしむ。是

の福德の因縁の故に、世樂の天王人王の富貴の處を求めず、現に在ます佛の處あるを聞きて、彼に往生せんことを願ふ。是の菩薩は、諸法の實相を知るが故に、生を樂はず。若は衆生の爲に、十方の佛の前に生じて、深般若波羅蜜を聞き、聞き已りて彼に於て無量百千の衆生を開化して無上道心を發さしむ。

されば、菩薩は、著欲の心を息止して、衆生を憐愍し、布施・持戒等を修し、深心を以て自行化他して、世樂の處を求めず、現在説法の佛まします處に往生せんと願樂するのである。菩薩が佛國に往生せんと願ふのは、著心にて生を樂ふのではない。智行を増進して衆生を利益せんが爲に、十方の佛前に往生して、深般若の法を聞き無量の衆生を開化せんとするものである。大心の善男子善女人が、阿闍佛國に往生するのも、阿彌陀佛國に往生するのも、かうした清淨の信樂によりて願生するものであらねばならぬ。『阿闍佛國經』の「阿闍佛刹善快品」には、彼の妙喜世界の快善なる莊嚴を詳説して、彼の佛刹には玉女寶に勝ること巨億萬倍と云はるゝほどの殊妙なる女人が存在することを説いてあるが、時に異比丘ありて、彼の佛刹の功德を聞きて、姪欲の意を起し、佛に白して彼の佛刹に往生せんことを願欲したりしかば、佛は「癡人、汝は彼の佛刹に生ずることを得ず」と誠められた。天親 (Vasubandhu) 菩薩の『無量壽經優婆提舍』には、「集むる所の一切の功德善根をもて自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲するが故に、一切衆生を攝取して共に彼の

安樂佛國に生せんと作願す」と論說せられ、魏の曇鸞大師は『往生論註』下に之を釋して、『無量壽經』に説ける三輩往生者は皆無上菩提心を發す、無上菩提心は即ち願作佛心であり、願作佛心は即ち度衆生心であると論じて、「若し人、無上菩提心を發さずして、たゞ彼の國土の受樂無間なるを聞きて、樂の爲の故に生せんと願するは、また當に往生を得ざるべきなり」と訓誡して居らるゝ。是れ淨土往生を欲願する者の最も注意すべき事である。

五

『阿閼佛國經』にても大『阿彌陀經』にても小品『般若經』にても、菩薩位としては、唯専ら阿惟越致(Avaivartika 不退轉)地が説示せられてゐる。大乘の最初期に於ては、初地・二地・三地・等の十地、歡喜地・離垢地・明地・等の十地は、未だ説かれてゐなかつた。たゞ阿惟越致(阿鞞跋致)と一生補處とが處々に説かれてゐる。かくて、小品『般若經』六には「阿惟越致相品」があつて、阿惟越致の菩薩の相貌が詳説せられた。其の德行を説ける中に、阿惟越致の菩薩の往生來生が説いてある。

常に他方の清淨なる佛國に生せんと樂欲し、意に隨ひて自在にして、其の所生の處に常に諸の佛を供養することを得。

須菩提(Subhūti)。阿惟越致の菩薩は、多く欲界色界に於て命終り中國に來生す。

阿惟越致の菩薩は、他方の淨土に往生して佛を供養し、又時には欲界の中國に來生することもある。此の經説は、大品『般若經』十七「轉不轉品」(「堅固品」)には、次の如くに説示せられてゐる。

是の人は、常に願じて諸の佛を見たてまつらんと欲し、在所の處を聞き、佛國土の中に、現に在ます佛あらば、願に隨つて往生す。是くの如く心常に晝夜に行ず。所謂、念佛の心なり。

是くの如く。須菩提。阿毗跋致(Avaivartika)の菩薩摩訶薩は、初禪・乃至・非有想非無想處を行じ、方便力を以ての故に、欲界の心を起し、若し衆生能く十善道を行すれば、及び現在に佛まします處ならば、中に在りて生ず。

されば、阿惟越致の菩薩は、晝夜常に念佛して、有佛の國土に往生せんと願樂するものである。又初禪・二禪・三禪・等の禪定を修行して、上界に生ずべき身なれども、衆生を教導せんが爲に欲界に生ずることもある。而して欲界に佛が出現して在ますならば、其の處に來生して、聞法し供養し、衆生を教化するであらう。此の事義をば、『大智度論』七十四には、次の如くに釋明せられてゐる。

是の人は、功德智慧大なるが故に、意の往く所に隨ふ。若し諸の佛の世界に至らんと欲すれば、意に隨つて生ずることを得ん。

是の菩薩は、欲を離れて諸の禪定を得と雖も、方便力を以ての故に、衆生の爲に欲界に生じ、現に佛まします處あれば欲界に生ずる者なり。故に衆生の爲に愛慢の分を留め、此の禪定の果

報を以て色無色界に生ぜず、たゞ禪定を以て其の心を柔和にし、其の報を受けず。

斯くの如く、菩薩は、淨土にも往生し、穢土の欲界にも生ずる。修禪の功德ありて上界の果報を受くべき身であつても、欲界の衆生を濟度せんが爲に、ことさらに愛慢の惑を留めて、方便力を以て欲界に生ずることもある。かくて、菩薩は、一佛國より一佛國に往生して、諸佛に師事し、衆生を開化して、自利利他の智行を増進するのである。

六

菩薩摩訶薩が一佛國より一佛國に往至するは、諸佛を供養して、深般若の法を授かり、佛國土を淨めて衆生を成就する願行を起修し、其の國土の衆生を教化せんが爲である。初發意の菩薩も上位の菩薩も、一佛國より一佛國に往生して、諸佛を供養し、衆生を教化する。是れ菩薩大乘の修行である。此の行相は、小品『般若經』四の「乘大乘品」に説示せられてゐる。

復次に。舍利弗。菩薩摩訶薩は、初發意より已來、菩薩の神通を具足し、衆生を成就し、一佛國より一佛國に至り、諸佛を恭敬し供養し尊重し讚歎し、諸佛より法教を聽受す。所謂、菩薩の大乘なり。是の菩薩は、此の大乘に乘じ、一佛國より一佛國に至り、佛國土を淨め、衆生を成就す。初より佛國の想無く、亦衆生の想無し。此の人は、不二法の中に住し、衆生の爲に身を受け、其の所應に隨つて自ら其の形を變じて之を教化す。乃し一切智に至るまで終に菩薩乘

を離れず。是を菩薩乘と名づく。

深般若を修得し諸法の實相を知解して、佛國の想なく衆生の想なく、淨穢不二の法に住して、その智慧より慈悲を起し、衆生の爲に身を受け、諸の佛國に往生して、佛を供養し衆生を教化し、淨佛國土・成就衆生の願行を修するのである。『大智度論』四十六には、此の義趣が釋論せられてゐる。此の經說に相當するものは、小品『般若經』には說かれてゐない。

七

菩薩は、他方世界に往生し、或は此の世界の天界人界に往生して、佛及び大菩薩の說法を聞き、深般若波羅蜜を修學して、衆生を開化する。かくて亦此の世界に佛ましまし、深般若の法を説く者あれば、菩薩は、他方世界より此の世界に來生し、天界より人界に來生し、人界より人界に生ずることもある。菩薩は、往生し來生して、佛を離れず、說法者を離れず、深法を聽受して衆生を教化するものである。小品『般若經』五の「無相品」の終には、かうした菩薩の來生が說かれてゐる。

須菩提。譬へば新産の犢子其の母を離れざるが如し。菩薩も亦是くの如し。深般若波羅蜜を聞き、說法者を離れず、乃至、般若波羅蜜を讀誦し書寫することを得ん。須菩提。當に知るべし。

是の菩薩は、人中に命終り、還て人中に生ず。——須菩提。菩薩あり是くの如き功德を成就し、他方世界に於て諸佛を供養し、彼に於て命終りて此の間に來生す。復次に須菩提。菩薩あり是

くの如き功德を成就し、兜率天上に於て彌勒 (Maitreya) 菩薩の般若波羅蜜を説くを聞き、其の中の事を問ひ、彼に於て命終りて此の間に來生す。

聞法の宿善ありて人界と他方世界と兜率天 (Tusita-Deva) より此の人界に來生することが説かれてゐるのである。此の經説は、小品『般若經』十五「大事起成辨品」に次の如く説かれてゐる。

須菩提。當に知るべし。是の菩薩は、人道中より終り、還て是の間の人中に生ず。何を以ての故に。是の佛道を求むる者、前世の時に深般若波羅蜜を聞き、書持し、恭敬し、尊重し、讚歎し、華香・乃至・幡蓋もて供養せり。是の因縁を以ての故に、人中に命終りて還て人中に生じ、是の深般若波羅蜜を聞き即時に信解す。―菩薩あり是くの如き功德成就し、他方世界に諸佛を供養し、彼に於て命終りて是の間に來生し、是の深般若波羅蜜を聞きて即時に信解し、書持し讀誦し、正しく憶念す。―復次に。須菩提。菩薩あり、彌勒菩薩摩訶薩より是の深般若波羅蜜を聞き、是の善根の因縁を以ての故に、此の間に來生す。

此の三種の來生は亦小品『般若經』二の「往生品」の初に説かれてゐる。此の「往生品」は、小品『般若經』には無いものであつて、小品『般若經』に於て誦出せられてゐる。かくて此の「往生品」には菩薩の來生と往生が問答せられた。而して先づ三種の來生が説かれて、其の後に種々の往生が説示せられてゐる。三種の來生が説かれてゐるのは、かの小品『般若經』の「無相品」の所説を承

けて誦出せるものであらう。

舍利弗、佛に白して言さく。「世尊。菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、能く是くの如く相應を習ふ者は、何處より終りて此の間に來生し、此の間より終りて當に何處に生すべきや。」

佛、舍利弗に告げたまはく。「是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、能く是くの如く相應を習ふ者は、或は他方の佛國より此の間に來生し、或は兜率天上より此の間に來生し、或は人道の中より此の間に來生す。舍利弗。他方の佛國より來る者は、疾く般若波羅蜜と相應せり。般若波羅蜜と相應せるが故に、身を捨て、此の間に來生し、諸の深妙の法、皆現じて前に在り、後また般若波羅蜜と相應し、所生の處に在りて常に諸佛に値ふ。」

大品『般若經』の「往生品」にはかやうに先づ菩薩の來生を説示してゐる。此の經説に就て、『大智度論』三十八には、種々の釋義がある中に、次の如き論説がある。

佛は三事を以て答へたまふ。一には他方の佛國より來生す。二には兜率天上より來る。三には人道中より來る。――

他方の佛國より來る者は、諸佛の前より是の間に來生し、諸根猛利なり。所以は何ん。無量阿僧祇劫の罪を除くが故なり。又諸佛に遇ひたてまつり心に隨ひて教導せらるゝが故なり。刀の好き石を得れば則ち利なるが如し。又常に聞いて誦し正しく般若波羅蜜を憶念するが故に利なり。

されば、菩薩は、他方佛國に往生して、佛に値遇して其の教導を受け、好き石によりて研ぎ磨かれたる刀の如き諸根猛利の摩訶薩と爲りて、其の他方佛國より此の世界に來生し、深般若を修得して衆生を教化すれば、利益頗る廣大なるものがあらう。是れ淨土に往生して穢國に還來し還相廻向の大悲を行ふ所以のものである。『維摩詰所說經』十二「見阿閼佛品」には、佛、舍利弗に告げて、「國あり妙喜と名づけ、佛を無動 (Aksobhya 阿閼) と號す、是の維摩詰 (Vimalakīrti) は、彼の國に於て歿して此に來生せり」と、說かれてゐる。維摩居士の如きは、東方の妙喜世界より此の娑婆世界の釋迦牟尼佛の所に來生し、深般若の方便を以て大衆を開導したる摩訶薩である。

八

大品『般若經』の「往生品」には、三種の來生が說かれたる後に、種々の往生が說示せられてゐる。今その中の五六の章句を抄出することにする。

舍利弗。此の菩薩摩訶薩は、一佛國より一佛國に至り、常に諸佛に値ひて終に諸佛を離れず。

舍利弗。菩薩摩訶薩あり、方便を以てせずして、初禪・乃至・第四禪に入り、亦六波羅蜜を行す。是の菩薩摩訶薩は、禪を得るが故に長壽天に生ず。彼の壽終るに隨ひて、是の間に來生し人身を得て諸佛に値遇す。是の菩薩は、諸根、利ならず。――

舍利弗。菩薩摩訶薩あり、六神通を得て、欲界・色界・無色界に生ぜず、一佛國より一佛國に至

り、諸佛を供養し恭敬し尊重し讃歎す。

舍利弗。菩薩摩訶薩あり、神通に遊戲し、一佛國より一佛國に至る。至る所の到處に、聲聞・辟支佛乗あること無く、乃至、二乗の名も無し。

舍利弗。菩薩摩訶薩あり、神通に遊戲し、一佛國より一佛國に至る。至る所の到處、其の壽、無量なり。

舍利弗。菩薩摩訶薩あり、神通に遊戲し、一國土より一國土に至る。至る所の到處に、佛・法・僧・無き處あらば、佛・法・僧の功德を讃す。諸の衆生、佛名・法名・僧名を聞くを用ての故に、此に於て命終りて、諸の佛の前に生ず。

此の經説は、『大智度論』三十八に釋論せられてゐる。此の「一佛國より一佛國に至る」と説かれたる「一佛國」と云ふのは、『長阿含』十八の『世記經』の「閻浮提州品」には、三千大千世界を一佛刹と名づけると説いてあつて、恐らく『般若經』も此の義意にて此の語を使つてゐるのでないかと想ふが、大『阿彌陀經』には、須摩題 (Sukhāvatī 極樂) 國土を説くのに「正しく西方に在り、是の閻浮提 (Jambudvīpa) の地界を去る千億萬の須彌山 (Sumeru-parvata) の佛國なり」と説いてあつて、此の「千億萬の須彌山」と云ふのが大『無量壽經』の「十萬億の刹・小『阿彌陀經』の「十萬億の佛土」と説かれたるに當るから、大『阿彌陀經』では一須彌山を中心とした一世界を一佛土と

して説いて居るやうでもある。ところが、龍樹菩薩は『大智度論』三十八に此の「一佛國」を解説して、「佛國とは、十方如恒河沙等の諸の三千大千世界なり、是を一佛土と名づく」と釋して、恒河（Ganges）の沙の如き數の三千大千世界を一佛教化の世界として、非常に廣大なる意味に「一佛國」が解釋せられてゐる。又『智度論』九十二にも、「佛土とは、百億の日月・百億の須彌山・百億の四天王等の諸天、是を三千大千世界と名づく、是くの如き等の無量無邊の三千大千世界を名づけて一佛土と爲す、佛は此の中に於て佛事を施作したまふ」と、釋論せられてゐる。それから、般若の方便なくして禪定を修して長壽天に往生する菩薩があるといふことに就ては、『智度論』に、次のやうな解釋が施されてゐる。

第二の菩薩は、方便なくして初禪に入り、乃至、六波羅蜜を行す。方便なしとは、初禪に入る時、衆生を念せず、住する時も、起つ時も、亦衆生を念せず、但だ禪味に著し、初禪と和合して般若波羅蜜を行すること能はず、是の菩薩は、慈悲心薄きが故に、功德薄少なり。功德薄少なるが故に、初禪の果報の爲に牽かれて長壽天に生ず。復次に、初禪の福德を以て衆生と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向する能はず、是くの如き等の無量は方便なき義なり。長壽天とは、非有想非無想處にして、壽八萬大劫なり。或は有人の言はく。一切の無色定を通じて長壽天と名づく。無形にして化す可からざるを以ての故に、得道に任^たへず。常に是れ凡夫の處するが故

に。或は無想天を説いて名けて長壽と爲す、亦得道に任へざるが故に。或は説いて、初禪より四禪に至るまで、淨居天（第四禪天に於ける不還果の聖者の生すべき最勝の五天）を除いて、みな長壽と名づく。味に著し邪見なるを以て道を受くること能はざる者は、還て人間に生ず。佛に値ふは、もと阿耨多羅三藐三菩提心を發したるを以ての故に、或は禪の中に於て諸の福德を集めなければなり。所以は何ん。彼の間は味に著して善心生じ難きが故に、經中に説くが如し佛、比丘に問ひたまひしが如き、「甲頭の土多きや、地上の土多きや」と、諸の比丘の言はく、「地の土は甚だ多し、喩と爲す可からず」と、佛言はく、「天上に命終りて、還て人中に生ずる者は、甲頭の土の如し、地獄に墮する者は地の土の如し」と。

長壽天は、佛の正法を受行し得ざる八難の一として、處々に説かれてゐる。『中阿含』二十九の『八難經』には、地獄・畜生・餓鬼・長壽天・邊國夷狄・聾瘡・邪見顛倒見・佛不出世の八難・八非時を説いてある。『增一阿含』三十六「八難品」の第一經にも、『長阿含』九の『十上經』にも、八難とか八不閑とかの一として長壽天が説示せられてゐる。若し般若の方便なくして修禪し諸善を行へる者は、此の長壽天に往生する。菩薩は一佛國より一佛國に往生して諸佛を供養し衆生を教化せなければならぬ。されば、天親菩薩の『無量壽經優婆塞舍』の如きも、五念門を説き、其の廻向門を力説して、智慧・慈悲・方便の三門を訓へ、般若と方便とを示教して、阿彌陀佛國に往生し入出の功德を成就す

ることを論宣せられた。蓋し其論旨たるや、此の『般若』の説示を稟受せられてゐることは、云ふまでもないことである。

九

如上の經説には、菩薩が欲界・色界・無色界の三界に生ぜずして界外の淨土に往生し、壽命無量にして長短自在の勝報を得て、三寶なき國土の衆生を教化せんが爲には、その無佛の土に往至する、といふ意味の事が説かれてゐる。他方の國土には、有佛の土もある、無佛の土もある、淨土もある穢土もある、欲界・色界・無色界もある、三界に非ざる界外の淨土もある。界外の淨土に往生するといふことに就ては、『智度論』三十八に、次の如く問答せられてゐる。

問ふて曰はく。他方の佛國に生ずとは、是れ欲界と爲すや、欲界に非ざるや。答へて曰はく。

他方の佛國の雜惡不淨なる者は、則ち欲界と名づく。若し清淨なる者は、則ち三惡道も三毒も無く、乃至、三毒の名も無し。亦二乘の名も無く、亦女人も無し。一切の人は皆三十二相あり。無量の光明、常に世間を照す。一念の頃に無量の身と作り、無量の如恒河沙等の世界に到りて無量阿僧祇の衆生を度し、還つて本處に來る。是くの如き世界は、地上に在るが故に、色界と名づけず。欲無きが故に、欲界と名づけず。形色あるが故に、無色界と名づけず。諸の大菩薩は、福德清淨業の因縁の故に、別に清淨の世界を得て、三界より出づ。或は、大慈大悲心を以

て衆生を憐愍すること有るが故に、此の欲界に生ず。

菩薩は清淨なる徳行の因縁にて斯うした界外の淨刹に往生する。今此の小品『般若經』の所説には『阿閼佛國經』や大『阿彌陀經』に説かるゝ淨土よりは幾らか加上せられた者が示されてゐる。阿閼佛の阿比羅提 (Abhirati 妙喜) 世界には、玉女寶に勝る女人が居て、聲聞の四果を得たる無數の弟子が存在する。阿彌陀佛の須摩題 (Sukhavi 極樂) 世界には、女人は居ないが、聲聞の弟子は無數である。かくて、此の小品『般若經』に説かるゝ界外の淨土には、女人の居ないことは申すまでもなく、聲聞 (Śrāvaka)・辟支佛 (Pratyekabuddha) の二乗の名も無い、純一大乗の佛土である。

そこで、『智度論』にも、「亦二乗の名も無く、亦女人も無し」と、解説してあり。その三界に非ざる界外の清淨土なることを説明する理義は、其の儘、阿彌陀佛の淨土へ當てがふこともできるが、『智度論』三十四には、「佛あり、一乗の説法を爲し、純ら菩薩を以て僧と爲したまふ。佛あり、聲聞と菩薩と雜へて以て僧と爲したまふ。阿彌陀佛の國の如きは、菩薩の僧は多く、聲聞の僧は少し」と論説して、阿彌陀佛の淨土は、小品『般若經』所説の純一大乗の淨土のやうでは無く、聲聞の僧が(菩薩の數よりは少いけれども)幾多存在して佛の説法を聞き開化せられつゝある世界であると、宣顯せられてゐる。ところが、佛滅後九百年出世の天親菩薩の時には、阿彌陀佛の淨土を、此の『般若』所説の淨土の如くに、純一大乗の佛刹として觀想することになり、かの『無量壽經優婆

提舍』には、「女人と及び根缺と二乗の種とは生ぜず」と、讃詠せらるゝに至つた。されば、淨土思想には、かうした進展があつたといふことを、學究者は、特に注意して考察する必要があると思ふ。

一〇

如上『般若』の經說には、菩薩が、神通に遊戲して、佛法僧なき處に往至し、三寶の功德を讃說して衆生を教化する、といふことが告げられてゐる。菩薩は、純一大乗の佛國に往生し、壽命無量の淨刹に往至し、而して又佛法僧なき國土に出遊して衆生を教導する。此等の事義に就きて、『大智度論』三十八には、亦次の如くに釋論せられてゐる。

菩薩に二種あり、一には生身の菩薩、二には法身の菩薩なり。一は結使を斷じ、二は結使を斷せず。法身の菩薩は、結使を斷じて、六神通を得、生身の菩薩は、結使を斷せず、或は欲を離れて五神通を得。六神通を得れば、三界に生ぜず、諸の世界に遊んで、十方の諸佛を供養したてまつる。神通に遊戲するとは、十方世界に到りて衆生を度し、七寶を雨ふらす。至る所の世界は、みな一乗清淨にして、壽は無量阿僧祇劫なり。

問ふて曰はく。菩薩の法は、應に衆生を度すべし。何を以てか但だ清淨なる無量壽の佛世界の中に至るや。答へて曰はく。菩薩に二種あり。一には慈悲心ありて多くの衆生の爲にす。二に

は多くの諸の佛の功德を集む。多く諸の佛の功德を集むることを樂ふ者は、一乗の清淨なる無量壽の世界に至る。多く衆生の爲にすることを好む者は、佛法衆なき處に至りて、三寶の音を讚歎す。

結使(煩惱)を斷じて漏盡通を得たる法身の菩薩は、三界に生を受けず、界外の清淨土に往至して、佛を供養し、佛の功德を集める。又慈悲心ありて衆生を化度せんとするには、三寶なき穢國に出遊して、佛を讚稱し正法を宣布する。菩薩には斯うした自利利他の徳行を修して阿耨多羅三藐三菩提に趣向するものである。清淨なる無量壽の刹土に永住して一生補處の位にまで到達する菩薩もあり淨土より他の國土に往至して衆生を濟度する菩薩もある。此の事を、『無量壽經』には、四十八願の中の第二十二の願に誓ひ、其の成就の文には、「彼の國の菩薩は皆當に一生補處を究竟すべし、其の本願ありて衆生の爲の故に弘誓の功德を以て自ら莊嚴し普く一切の衆生を度脱せんと欲せんをば除く」と説いてある。天親菩薩の『無量壽經優婆塞』には、「彼の世界の相を觀するに、三界の道に勝過せり」と、界外の淨土なることを讃じて、「二乗の種は生ぜず」と、純一大乗の佛刹なることを顯示し、此の淨土の菩薩の徳行を叙すには、「何等の世界か佛法徳實なからん、我、願はくば、皆往生して、佛法を示すこと佛の如くならん」と、菩薩が阿彌陀佛の淨土より他の佛法僧の三寶無き國土へ往生して衆生を度脱せんとすることが説かれてゐる。此等は此の小品『般若經』の「往生品」

の所説を稟承せられたものと想はるゝ。神通に遊戲して三寶なき處に至りて衆生を教化するは、『無量壽經優婆提舍』に説ける五功德門の第五の園林遊戲地門のこともあり、之を曇鸞大師は還相の廻向であると云ふて居らるゝが、かの論偈には、「我、願はくば、皆往生して、佛法を示すこと佛の如くならん」と、淨土の菩薩が他の無佛の世界へ往生せんことを願じて佛法なき處にて佛事を行ふことが説かれて、「還相」とは云はず「往生」と云ふてある。穢國に還來するといふことにもならうが、此の世界に限らず何れの世界になりとも往いて佛法僧なき處に於て說法利生するのであるから「往生」と云へば、廣い意味が顯はるゝ。園林遊戲地門の論文には、「應化身を示して」とありて、眞身が往至するのではないやうにも見ゆるが、偈には「往生して」とあり、應化身といふやうな思想は、龍樹菩薩已後、天親菩薩の時代には、行はれてゐるが、早き時代には、さうした思想が流れて居ないやうで、『般若經』や『無量壽經』には、菩薩が淨土へ往生し淨土より亦他の國土へ往生してゆくことにして説いてある。『無量壽經』などには、往詣して他方の佛を供養することも説いてあるが、それは往生ではないけれど、長短自在の壽命無量であつて淨土に命終つて他の國土へ往生して諸佛を供養し衆生を教化してゆく相が、第二十二の願や其の他に説かれてゐるのである。それを『般若經』の「往生品」には「一國土より一國土に至る」と説いてゐる。此の場合、「一佛國」と云ふてないのは、無佛の國土へ往至することを説くのであるから、かやうに説示してゐるのであらう。

大品『般若經』の「往生品」には、廣く菩薩の來生往生の相を説き、最後に、三百の比丘と六萬の欲天子と十千人との往生が記說せられた。三百の比丘が著する衣を佛に上りて無上菩提心を發したる時、佛、微笑し給ひ、阿難(Ānanda)が其の微笑の因縁を問へるに答へて、四衆の得道を記說せられた。

佛、阿難に告げたまはく。「是の三百の比丘は、是より已後六十一劫にして當に佛と作り皆號して大相と名づくべし。是の三百の比丘は、此の身を捨て、當に阿閼佛國に生ずべし。及び六萬の欲天子は、みな阿耨多羅三藐三菩提心を發し、彌勒佛の法の中に於いて出家して佛道を行せん。」

是の時、佛の威神の故に、此の間の四部衆、十方面に各千佛を見たてまつる。是の十方の國土は嚴淨にして、此の沙婆國土の及ばざる所なり。爾の時、十千人、願を作さく、「我等、淨き願行を修し、淨き願行を修するが故に、當に彼の佛の世界に生ずべし」と。佛言はく「是の十千人は、此に於て壽終り、當に彼の世界に生ずべし、終に諸佛を離れず、後當に佛と作りて、皆、莊嚴王佛と號すべし。」

此の經說に據れば、般若波羅蜜を聞きて大心を發起したる三百の比丘は、命終りて當に阿閼佛の妙

喜世界に往生し、六十一劫の後に成佛するであらう、といふことが、豫言せられた。六萬の欲天子は彌勒佛出世の時に其處へ生れ出て出家修道するであらうといふことが、豫言せられた。十千の人々は十方の嚴淨なる佛土へ往生し後に皆佛と成るであらうと豫言された。『般若』誦出の菩薩には、阿閼佛國への往生が、特に念願せられたものであつたらしい。彌勒佛の出世を待ちて、其の所へ生れ出て聞法し得道するといふことは、『阿含』にも存し、頗る早き時代に起發して、大小乗の教徒にゆきわたりたる、極めて遠い未來往生の思想である。かくて、大乘教徒には、また、十方に佛まします淨土あり、其の一佛土に往生し、其の一佛土より復他の佛土に往生し、菩薩は佛を離れず、諸佛に師事し、恭敬供養し、衆生を教化し利濟して、自利利他の行を成就せんとする念願があつた。今此の經說には、此等の往生思想の總てが、佛の記別の言詞の中に顯示せられてゐる。

二二

『般若經』には、阿彌陀佛國への往生を説かず、阿閼佛國への往生を説く。かくて、阿閼佛國への往生は、また小品『般若經』七「恒伽提婆品」の初にも、佛の記説として、誦傳せられてゐる。

爾の時、會中に一女人あり、恒河沙提婆(Gaṅgādeva)と字づく、座より起ちて、偏に右の肩を袒き、右の膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、佛に白して言さく、「世尊。我、是の事に於て驚かず怖れず、我、來世に於て、亦衆生の爲に斯の要を演說せん」と。即ち金華を持して佛に

散するに、佛の頂上に當る虛空の中に住す。時に佛は微笑したまふ。―佛、阿難に告げたまはく。是の恒伽提婆女人は、當に來世の星宿劫の中に於て成佛することを得べし、號して金華と曰ふ。今、女身を轉じて男子と爲ることを得て阿閼佛の土に生じ、彼の佛の所に於て常に梵行を修し、命終の後、一佛土より一佛土に至り、常に梵行を修し、乃し阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで諸佛を離れず。―阿難。是の女人は、然燈佛 (Dipaṅkara-buddha) の所に於て初めて善根を種え、是の善根を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、亦金華を持ちて然燈佛に散じ、阿耨多羅三藐三菩提を求めたりき。阿難。爾の時、我は五莖の華を以て然燈佛に散じ、阿耨多羅三藐三菩提を求む。然燈佛、我が善根の淳淑なるを知り、即ち我に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたまひき。時に、此の女人、我の記を受けたるを聞き、即ち發願して言はく、我も亦是くの如く未來世に於て當に記を受くることを得べしと。如今、是の人、阿耨多羅三藐三菩提の記を受くることを得たり。」

此の經説には、女人成佛と變成男子と淨土往生とが記述せられてゐる。恒河提婆といふ女人は、昔然燈佛の所に於て初めて善根を植ゑ、今、此の娑婆世界に生じて釋迦牟尼佛の説法を聞き、散華供養して記別を授かり、來世は阿閼佛の妙喜世界に往生して男子と成り、また佛を供養し、衆生の爲に法要を説き、其の後、一佛國より一佛國に往生して常に梵行を修し、此の世界の賢劫の後の星宿

劫の時に來生して正覺を成じて金華佛となる。提想竭羅 (Dīpaṃkara) を然燈とも燈光とも錠光とも定光とも譯して、此の佛の事蹟は、『四分律』三十一・『增一阿含』十一・三十八・『修行本起經』・『瑞應本起經』等の種々の聖典に說かれてゐて、釋尊の因位本生の彌却 (Megha) が五莖の蓮華を以て此の佛に供養して當來成佛の記別を授かつたといふ有名な物語が傳へられてゐる。かくて、今此の小品『般若經』にても、彼の釋尊の本生譚と結び付けて此の恒河提婆の本縁が説示せられた。此と類似したる説相は、『無量壽經』の異本である『Sukhāvatīyūṭa』の終にも見出さるゝ。それは、提想竭羅(燈作)佛の所に於て忍を得て無上正等覺に進趣して退轉せず今釋尊の所に來會したる八十俱胝尼由尼の衆生は、阿彌陀佛によりて成熟せられ昔の菩薩の行を修行しつゝ須摩題世界に往生して其の本願の行を成滿する、といふ事が記されてゐる。されば、菩薩は、過去に然燈佛等の諸佛に值遇し、今は釋迦牟尼佛の所にも來會して、阿閼佛・阿彌陀佛等の在します清淨の國土にも往生し、一佛國より一佛國に往生して常に梵行を修し、終に願行成滿して何れかの世界に於て正覺を圓成するものである。小品『般若經』の此の所說から推想するなれば、此の『般若』誦出已前に阿閼佛と其の淨土が既に大乘教徒の信念の對象と成つてゐたことが察せらるゝわけで、『阿閼佛國經』の如きは、其の文學的色彩から見ても、『般若』已前の最古の方等經であることが判定せらるゝのである。此の小品『般若經』の「恒伽提婆品」は、小品『般若經』十八にも亦「恒伽提婆品」(『河天品』)と

して幾らか敷衍して説かれてゐる。それには因名をも金華菩薩と名づけらるゝことになつて居る。

佛、阿難に告げたまはく。是の恒伽提婆姉は、未來世の中に當に佛と作るべし、劫を星宿と名づけ、佛を金華と號す。阿難。是の女人は、女身を畢りて男子の形を受け、當に阿閼佛の阿毘羅提 (Abhirati 妙喜) 國土に生じ彼に於て梵行を淨修すべし。阿難。是の菩薩は、彼の國土に在りても亦金華と號す。是の金華菩薩は、彼に於て壽終りて復他方の佛土に至る。一佛土より一佛土に至りて諸佛を離れず。

されば、恒河提婆は、阿閼佛國に往生して男子と成り金華菩薩と號し、未來の此の世界の星宿劫に世出して金華佛と成る。因名果名の同じきは、彌勒菩薩が彌勒佛に成り、阿閼菩薩が阿閼佛に成られたといふ、類例のある事である。恒河提婆といへる名に就ては、『大智度論』七十五に、「有人の言はく、是の女人の父母は、恒河の神に供養して、此の女を得るが故に、恒河提婆と云ふ」等と、龍樹菩薩が或る人から聞かれた一傳説を記してある。

一三

『般若經』には、最後に、薩陀波倫 (Saddhāpralāpa 常啼) 菩薩が求道して東に行き衆香城に至り曇無竭 (Dharmagata 法尚) 菩薩の説法を聞きて得道したることが説かれてある。而して其の最後に、薩陀波倫菩薩が現在佛の所に往生して衆難を離れ佛道を増進することが告げられてゐる。小品『般若

經』十にては、「薩陀波崙品」・「曇無竭品」の次の「囑累品」に此の事を叙してあり。

薩陀波崙 (Saddhāprāṇhita) は、是れより已後、多聞、智慧、不可思議にして、大海水の如く、世々に生ずる所、諸佛を離れず、現に諸佛在ませば常に其の所に生じ、一切の衆難、皆悉く斷ずることを得たり。

此の事は、小品『般若經』二十七には「曇無竭品」(「法尙品」)の終に說かれてゐる。夢中見佛と隨願往生が叙說せられた。

薩陀波崙菩薩は、是より已後、多聞、智慧、不可思議にして、大海水の如く、常に諸佛を離れず、有佛の國中に生じ、乃至、夢中にも未だ曾て佛を見ざる時あらず、一切の衆難、皆悉く已に斷じ、在所の佛國に、願に隨ひて往生す。

此の經説は『大智度論』百に釋論せられ、今世の果報と來世の得道とを告げて、念佛三昧を修行し佛國土に往生することが菩薩大乘の要諦であることを解説してあり。

薩陀波崙は是より以後、深く法を愛樂するが故に、多く諸の經を集めて、廣く誦し多く聞くこと、阿難の佛の所説みな能く持つが如し。薩陀波崙も亦是くの如く、多聞、智慧、不可思議にして、大海水の如く、即ち是の世に於て常に佛を離れず。是くの如き等を名づけて今世の果報と爲す。身を捨て、常に有佛の國の中に生じ、好んで念佛三昧を修行するが故に、乃至、夢中に

も初より佛を見ることを離れず、地獄等の諸難、皆已に永く絶し、意に隨ひて諸佛の國土に往生す。其の深く般若波羅蜜に入りて無量の功德を集むるを以ての故に、業に隨つて生ぜず。薩陀波崙は、一佛土より一佛土に至つて、諸佛を供養し、衆生を度脱し、無量の功德を集む、譬へば豪貴の長者の一會より一會に至るが如く、乃至、今は大雷音佛の所にありて、淨く梵行を修す。若し般若波羅蜜を求めんと欲する者あらば、當に薩陀波崙菩薩の如く堅く正しく一心に傾動す可からず。

般若波羅蜜を求むる大乘の求道者は、薩陀波崙菩薩の如く、多く法を聞きて、常に佛を離れず、念佛見佛して佛國土に往生し、三途八難を離れ、業に牽かれて輪廻轉生すること無く、願に隨ひ一佛土より一佛土に往至して、諸佛を供養し衆生を教化して、自利利他の願行を成滿せなければならぬ。菩薩は常に佛を離れず佛に師事せんとする。されば、佛名を聞いて佛所に往生せんと願ひ、佛を念じ佛名を稱し夢中にも佛を見るに至る。念佛見佛は早くより菩薩の體驗したる所であつて、『阿闍佛國經』大『阿彌陀經』にも説かれ、大『阿彌陀經』下の初に三輩往生を説けるには、其の最上第一輩と中輩の行相を示すに、夢中見佛の事が告げられてゐる。かばかりに菩薩は、佛を離れず佛説の深法を聞き佛恩を念じ、佛智に相應して如實に大乘を修行し、其の深心の信慧を以て衆生を教化し利濟して、阿耨多羅三藐三菩提に近づく。而して其の無上正等覺を成就するまでには、一佛國より

一 佛國に往生して、自利利他の徳行を増進する。是れ『般若經』等に説かれたる菩薩大乘の行相である。

淨佛國土に就ては、更に稿を改めて論ずることにしやう。